

坪内逍遙の比照文学と兄弟文学

— H・M・ポズネットの受容 —

平 辰 彦

坪内逍遙（一八五九—一九三五）は、明治二十年代のはじめに「比照文学」と題して日本で初めて比較文学の講義を早稲田大学の前身である東京専門学校でおこなっている。

この講義は、ハチエソン・マコーレー・ポズネット（一八五五—一九二七）の『比較文学』（Comparative Literature）の「要点ヲ抄譯」して、その「文学論」を土台にして行なわれたことが、その「緒言」によってわかる。

今日、この講義録は、早稲田大学図書館に所蔵されているが、その翻刻は井上英明・富田仁両氏の共編によって『比較文学年誌』（早稲田大学比較文学研究室紀要、昭和四十年十一月刊）の第二号に所収されている。

しかしこの講義録の一部は、すでに明治二

十三年（一八九〇）三月に中村石郎の寄贈によって『山形縣共同会雑誌』（第四号）に掲載され、高山樗牛や畔柳芥舟らに大きな影響を与えた。

逍遙は、この講義を通して自己の「管見ノ文学」を確立しようとしていたが、同時にポズネットの著書を通してわが国の文学と外国文学の作品を比較対照して文学の「対比研究」を実践していったのである。

特に明治二十三年の三月より五月にかけて『読売新聞』に掲載された逍遙の「兄弟文学」は、その「対比研究」の嚆矢の評論であり、その方法論をポズネットの著書から逍遙が得たことは明らかである。

以下、この「兄弟文学」を通して逍遙のポズネット受容の一面をさぐってみたい。

この評論は、明治二十三年三月二十七日にはじめて「読売新聞」（第四五八六号）紙上に掲載されるが、その冒頭で逍遙は、次のように述べている。

ふたごの似たるは更にもいはずまことの兄弟の似たるもをかしからず当然のことなればなり他人のそら似こそいとど目に留るものなれ……

この一文から逍遙が「兄弟文学」で試みた「対比研究」は類似点よりも相違点に重点を置いて評論していることがわかる。つまり逍遙は似ていても「他人のそら似」を強調することで結果的に東西文学の基盤となる独自性を明確にしたのである。

この「兄弟文学」で逍遙は、次の四組の東西文学の作品を並べ、それぞれの梗概を述べ、

各組の作品を比較対照しながら評論している。

① 東—『西遊記』
西—『天堂遊源』(『天路歷程』)

② 東—『武蔵あぶみ』
西—『倫敦大疫病の記』

③ 東—『四十八癖』
西—『若紳士かたぎ』

④ 東—『南総里見八犬伝』
西—『フヘアリ、ク井ーン』(神麿伝)

次にこの各論の要点を簡単に記してみよう。

①では、吳承恩(一五〇〇—八二)作とされる『西遊記』とジョン・バニヤン(一六二八—八八)の代表作『天路歷程』(Purina's Progress)を逍遙は、「双つとも聖人の教を種として小説の形とせるもの」として対比し、この二作には「宗旨にかかるアルレゴリ(寓意譚)」があると語る。

②では、浅井了意(一六一九—九一)作の仮名草子『武蔵あぶみ』とダニエル、デフォー(一六六〇—一七三三)の『倫敦大疫病の記』(A Journal of the Plague Year)とを対比して、そこに「記事文学」の「相似たる所」を認めると共に「異なる所」も指摘している。

それは、前者が「話の首尾」を通すため、「事実其儘」を「想像の空談」(虚構)でつな

いでいるのに対して、後者では最初から「仮作物」(虚構)であることを前提として書かれているというのだ。この逍遙の両作品における「虚構」の果たす役割についての指摘は逍遙の小説観を考える上できわめて貴重である。

③では、式亭三馬(一七七五—一八二二)の滑稽本である『四十八癖』とチャールズ・ディケンズ(一八一二—七〇)の写生文である『若紳士かたぎ』(Sketches of the Young Gentleman)とを対比して、双方とも「専ら性癖を主として脚色趣向を立てて」「人の弱所を写し出して読者を笑はしむる」と同時に「反省せしむ」点が両者の類似点であると述べ、さらにその相違点は、前者が「重に問答と独言とをもて人物の性癖を見せ」ているのに対して、後者が「大抵作者の筆を用ひて細かく傍より様子を叙状す」る点にあるという。また両作の欠点は、共に「人間の脾心に入らず」「煩惱の由来」の「描写」が不十分な所であるという。

④では、曲亭馬琴(一七六七—一八四八)の代表作『南総里見八犬伝』とエドモンド・スペンサー(一五五二—九九)の代表作『妖精の女王』(The Faerie Queene)とを対

比して二作共に「着想」が酷似しているという。

さらに逍遙は、この「着想の相似たる」理由をその先行文学の粉本の相似によると述べ、前者が「孔孟の教を元として仁義以下八行を人に擬て八犬士を作り」「我國の戦国武士を見せたる叙事詩風の小説」であるのに対して、後者では「プラト、アリストートルによりて十二の美德を定め之れを十二人の名士にしたてて」「中古騎士の勲功を見せたる寓意ある叙事詩」になっているという。

また逍遙は、両作を対比して前者はまず「八犬士の趣向」が先にあり、その「後に思ひつき」「仁義以下八行」を「人に擬て作ったのであり、それは「全篇の趣向の為」にはなっていないが、後者の発想はまず「十二徳を得て」「後に全篇を工夫」して「全篇の趣向悉く寓意的」になったのだという。

以上が、「兄弟文学」の概要であるが、以後、逍遙は沙翁と近松の対比研究を中心にみずからの文学観を打ちたてていく。その原点にこの「兄弟文学」があり、それがポズネットの直接の影響によって書かれたものであることを指摘しておく。